



宮司プレス 第二百十九号

彦島八幡宮 宮司ニユース

発行者 彦島八幡宮

宮司 柴田 宜夫

発行 令和六年 八月三十一日

◇宮司の柴田です。お待たせしました、ぎりぎりとなりましたが、「月刊宮司プレス」第二百十九号の発行です。さて、立秋を過ぎたとはいえ、残暑きわめて厳しき毎日でした。過日の日曜日の朝、先月の二十六日から久しぶりの降雨、しのぎやすくなりました。さらに、

昭和三十四年の伊勢湾台風、昭和三十六年の第二室戸台風に匹敵する史上最強と報道されている台風十号の接近の余波でありましょうか、ようやく、涼やかな気候となりました。

◇宮司プレス既刊号にも詳述していますが、地球上の有史以来、国と国との諍い、いわゆる交戦状態、戦争が全くない、平和な時間を積算すると、なんと、僅か二百五十年足らずし

かありません。これを「戦間期」といいます。

翻って、わが国の歴史を紐解いてみますと、もちろん、外国との交戦もありましたが、国内においても諍いのたえない、天下統一のためと

はいえ、同じ日本人同士が刃を向けて争った時代もありました。その歴史の中で、全く

内乱もなく、穏やかな平和な時間がありました。このことも、宮司プレス既刊号に幾度となく詳述していますが、「パクス ヤポニカ」といいま

す。「パクス ヤポニカ」、これは、ラテン語で、「日本の平和な時代」という意味です。この「パクス ヤポニカ」は、保元の乱(西暦一、

一五六年)までの平安時代の三百五十年間と、江戸時代の二百五十年間だといわれています。

今、私共は、先の大戦終結後より、明年八十年となりますが、今年で七十九年、これが、「戦間期」という名の平和な時間です。前述の地球上の戦間期の三分の一が、日本の戦間期という

ことになります。これは、とても、貴重な

けがえない尊い時間です。しかも、この

時間を得るために、陸海軍民間人合わせて三百

十万人もの同胞を喪っています。その三百

十万人の方々の尊い命が、戦争で犠牲になられているのです。御英霊に感謝の心を捧げ、け

つして忘れてはなりませんし、全ての御霊安ら

かなれと祈りを捧げなければなりません。そ

のような思いをこめて、八月十五日の月次祭を御奉仕上げました。

◇さて、世界に目を向けましても、ロシアによるウクライナ侵攻は二年半にもなるうかとい

うのに、終焉は無論のこと、休戦の兆しすら

ありません。イスラエルとパレスチナの紛争

は、史上最悪だといわれています。世界の戦

間期は、いつになったら始まり、カウントされ

ていくのかと危惧されます。

◇「渥美育子式グローバル教育」を開発され、

世界のトップ企業を顧客こきゃくに持ち、国際的に通用する人材の育成に尽力されているのが、渥美育子さんです。その渥美さんが、提唱ていしょうされているのが、「四つの文化コード」です。それは、

世界を四つの文化圏たふくに大別たいべつされています。ま

ず一つめは、「リーガル コード」、これは、法律やルール、さらに、ノウハウを重視する欧米や北欧の国々にみられるものです。次に、二

つめは、「モラル コード」、人間関係や道徳観に価値の中心をおくもので、日本を含むアジア、ラテンアメリカ諸国にみられます。三つめは、

神の教えに価値の中心をおく、中東諸国ちゆうとうしよこくにみ

られる「レリジヤス コード」。さらに、四つめは、「リーガル コード」、「モラル コード」、

「レリジヤス コード」の三つが混ざりあつた

「ミックス コード」の四つです。 昨今では、

異なる特徴や特性を持つ人々が共存きようぜんしながら、それぞれの能力や考え方を活かして、新しいものを造りだす、「共に生き 共に生む」という「共生」、「ダイバーシティ(多様性)」という考

え方が広く認知にんちされる時代となりました。こ

れからは、「それぞれの違い」を争いの種にしな

いで、成長の足掛かりとしていくことが大切な

のではないのでしょうか。

◇前述の「パクス ヤポニカ」が、なぜ可能だ

つたのか、その要因の一つにあげられるのが、

他文化を融合ゆうごうさせることのできる日本人の持

つ特性である、「寛容性」と学者は説いていま

す。 その顕著けんちやくたるものが、「神仏習合」だと

いわれています。 日本に、仏教が初めて伝来

した奈良時代、当時の天皇陛下を始め政府関係

者は、「他国神」として、幾多の政争せいそうを経て

受容、受け入れました。 現代社会においても、

神社神道と仏教が併存へいぞんしています。 まさに、

「神仏習合」こそ、日本人の持つ「寛容性」で

あり、さらに、この「四つの文化圏」を生きて

いく指標しひょうとなるのではないかと思ひます。

◇「自分の常識が全て正しい」と決めつけない

時」「その場」「その人」に対して、広い視野しやを

もちつつ、周囲と協調きうてうしながら、麗うつくしい家族、

麗うつくしい職場、麗うつくしい地域社会、「まほろば」とな

るよう日々暮らしたいものです。 すこし、

大袈裟おおげさですが、戦間期が永遠に続くためにも、

ひとりひとりの、その小さな心がけが、大切に

思おもえてなりません。 御自愛ごじあいください。

◇夏越祭 *七月二十九日〜三十日



◇月次祭 ◆本宮



*八月十五日

